

埋蔵文化財緊急調査事業に係る
埋蔵文化財調査報告

平成10年度増山城跡総合調査概報

増山城跡 II

1999年3月

砺波市教育委員会

増山城跡 II 正誤表

頁	行	誤	正
4	3	K郭は堀に狹まれた～	K郭は堀に狭まれた～
14	21	11は唐津碗。	11は唐津碗。
14	28	12は榎の一部で、	12は碗の一部で、
18	6	漆塗り碗については～	漆塗り榎については～
18	7	高台が高く碗部の～	高台が高く榎部の～

序 文

増山城は砺波平野の東部、射水郡と隣接する丘陵部に位置し、砺波地方の歴史と深く関わりを持っています。その歴史は南北朝時代から近世の初めに至る約250年に及び、17世紀初頭の時点で廃城になっています。

現在増山城跡は、「越中三大山城」のひとつとして県内有数の規模を誇るものとして知られています。この時代の山城跡で、往時の状態を良好な形で広範囲に保存されているところは県内でも例がないといわれており、城跡は昭和40年に富山県指定史跡に、周辺の土塁は昭和56年に砺波市指定史跡に指定されています。

増山城跡に関する本格的な調査は、昭和60年代前半に実施されましたが、埋蔵文化財調査が実施しえなかった点などに課題が残っていました。そのため、史跡構造の解明を目的とした増山城跡総合調査事業を、国や富山県の補助を受け平成9年度から4カ年計画で実施することにしました。

今年度については、通称「馬洗い池」を始め、通称「二の丸」南の空堀や高岡徹氏作成の概念図でいう「K郭」など、主要郭東部の発掘調査を実施し、その成果を概報として作成しました。この小冊子は、まだまだ内容としては不十分ですが、発掘調査によって得られた数少ない資料を紹介し、文化財を通じて先人の文化を理解・伝承するとともに、地域の歴史と文化的活用にいくばくかのお役に立てば幸いです。

おわりに、調査の実施に多大なご協力をいただきました宇野隆夫富山大学人文学部教授、西井龍儀氏、高岡徹氏をはじめ増山城跡総合調査委員会委員や地元、関係機関など関係のみなさまに厚くお礼申しあげます。

平成11年3月

砺波市教育委員会

教育長 飯 田 敏 雄

例　　言

1 本書は、富山県砺波市増山地内に所在する増山城跡の埋蔵文化財調査概要である。

2 事業は、緊急発掘調査事業によって実施した。

3 調査期間・面積は次のとおりである。

　調査期間　平成10年10月16日～平成10年12月9日

　測量調査対象面積　約75,000m²

　発掘面積　約160m²

4 調査体制は以下のとおりである。

増山城跡総合調査委員会	富山大学人文学部教授	宇野隆夫
	日本考古学協会会員	西井龍儀
	富山県埋蔵文化財センター	所長 岸本雅敏
	富山県教育委員会文化課	課長 棚瀬佳明
	富山大学人文学部助教授	前川　要
	富山県文化財保護審議会	会長 佐伯安一
	城郭研究家	高岡　徹
	柄柳野地区増山自治振興会	土田昌春
	砺波市教育委員会	教育長 飯田敏雄
	砺波郷土資料館	館長 新藤正夫
調査担当者	砺波市教育委員会生涯学習課	学芸員 利波匡裕
調査事務局	砺波市教育委員会	教育次長 野村泰則
	同 生涯学習課	課長 老松邦雄
	同 生涯学習課係	係長 川原国昭
	砺波郷土資料館	主任 吉川義忠

なお、現地の清掃・作業員については、増山地区自治会(城田栄一区長)、増山城跡整備委員会(土田嘉一委員長)、砺波市シルバー人材センターより協力を得た。測量調査については㈱上谷に委託した。

5 資料の整理、本書の編集と執筆は、宇野隆夫、西井龍儀、高岡徹の指導を受け、利波が行った。

6 調査期間中および資料整理期間中、次の方々から御教示・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)

安念幹倫、河西健二、久々志義、坂井秀弥、宮田進一、村田修三

7 調査において次の地権者の方々に御理解・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)

石田繁、石田孝之、高島忠行、田中忠治、土倉豊、土田由夫、遠田ユキ子、信田豊次、宮野庄作

8 本書の挿図の表示は次のとおり。

方位は真北、水平水準は海拔高である。

9 出土品および記録資料は砺波市教育委員会で保管している。

10 発掘調査・整理参加者は次のとおりである。

柏樹直樹、高木美奈子、野手雅子、平木誠、松岡礼子、安カ川恵子(以上砺波郷土資料館)、天野秋一、荒木久平、石田孝之、今田和夫、清原政正、沢田制治、高島一子、田島貞子、田中忠治、中居勝美、中居藤夫、中島実、野原芳雄、信山正明、安カ川礼子、山崎信雄、(以上砺波市シルバー人材センター)、阿部来、荒木慎也、表原孝好、佐々木亮二、砂田晋司(以上富山大学考古学研究室)

目 次

序 文

例 言

目 次

I 造跡の立地と歴史的環境.....	1
II 調査に至る経緯.....	1
III 調査の経過と方法.....	4
1.調査の経過.....	4
2.座標軸の設定.....	4
IV 調査の概要.....	4
1.概況.....	4
2.遺構.....	5
3.遺物.....	14
V まとめ.....	16
参考文献.....	18
写真図版.....	19

図表

第1図 周辺の遺跡分布図	第7図 トレンチ平面・断面図3 (T1-1・2, T3)
第2図 平成10年度調査範囲図	第8図 トレンチ平面・断面図4 (T4-1・2, T5)
第3図 グリッド配置図	第9図 遺構断面図1 (T2-1~4)
第4図 トレンチ・断面位置図	第10図 遺構断面図2 (T1-1, T3, T4-1・2, T5)
第5図 トレンチ平面・断面図1 (T2-1)	第11図 出土遺物
第6図 トレンチ平面・断面図2 (T2-2~4)	第12図 K郭周辺部における空堀・郭の変遷
第1表 周辺の遺跡一覧	

I 遺跡の立地と歴史的環境

増山城跡は砺波市の東部、婦中町との境に近い庄東山地の丘陵上に位置する。芹谷野段丘と庄東山地の間には和田川が複雑に蛇行し、地質基盤である青井谷泥岩層を抉り込み、深い谷を形成している。その谷をせき止めて和田川ダムが築かれ、ダムの東側、急崖の上に増山城跡が立地している。

周辺には旧石器時代から近世に至るまで、多くの遺跡の存在が知られている。特に城跡の近隣には、増山団子地窯跡をはじめ増山外日喰山窯跡、小丸山1・2号窯跡、増山赤坂窯跡、増山笹山窯跡、正權寺後島窯跡など、古代の窯跡が多数確認されており、芹谷野段丘沿いに比定されている井山、伊加流伎、石粟の各荘との関連も考えられる。増山城跡と対峙して和田川を挟んだ丘陵上には増山遺跡が存在する。昭和52年、圃場整備事業に関連して発掘調査が行われ、縄文・古代の遺物、中世末～近世初頭の遺物・遺構が検出された。この発掘調査結果とこれまでの文献資料により、当地が増山城跡の城下町であることが確認されている。

II 調査に至る経緯

増山城跡の本格的な調査については、高岡徹氏、西井龍儀氏を中心として砺波郷土資料館が昭和62年から約3年にわたって実施されている。この調査では、城郭・文献・考古の三分野の研究者による調査グループが結成され、作業が進められた。調査の結果、増山城自体の繩張りが初年度にはほぼ判明し、二重の空堀や櫓台、長大な馬堀、郭跡など数々の成果があげられた。その成果をふまえ、昭和63年11月には増山城跡を中心として「北陸地方中世城館セミナー」が開催された。

これまでの調査では、増山城跡の現地形観察が行われていたが、より明確に増山城跡の実態を把握するため考古学的な調査が必要であることが望まれていた。これを受けて、砺波市では平成9年度に増山城跡総合調査委員会を設立し、増山城跡の実態を解明するとともに、重要な文化遺産を周知・活用する方法を検討することとなった。平成9年度の調査では、城跡南部を中心として発掘・測量調査を実施した。その結果、無常東下郭を中心とした部分において、複数回にわたる大規模な造成工事が実施されていること、外側空堀を人為的に埋めていること、階段が確認されたことなど多くの成果が得られた。

平成10年度調査については、馬洗池、通称「二の丸」南側の堀、K郭付近で発掘調査し、測量調査は通称「一の丸」「安室屋敷」「又兵衛清水」など城域の北西部を行った(第2図)。



第1図 周辺の遺跡分布図 (S = 1/25000)

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	角山城跡	山城	中世	35	袖成八波跡	散布地	鶴文
2	増山遺跡	遺跡・墓群	古・近・古	36	袖成C遺跡	散布地	鶴文
3	増山鬼田痕跡	窯	奈良	37	袖成D遺跡	散布地	旧石器?
4	高沢町古道跡	遺跡・墓群	古代	38	袖成E遺跡	散布地	直文・手字・古字
5	高沢島I・II遺跡	遺跡・墓群	古・近・古	39	鹿塚	塹	中世?
6	埋山妙覚寺取廻跡	廻	奈良	40	坂塚遺跡	散布地	鶴文
7	埋山西遺跡	散布地	古代?	41	須藤末崎遺跡	製鉄	古代
8	宮魚岸跡	窯	奈良	42	須藤末崎A遺跡	散布地	鶴文・直文・古字
9	宮森遺跡	寺院	遺跡・墓群	43	津原向島遺跡	製鉄	古代
10	行者塚	塚	中世?	44	正福寺今瀬跡	散布地	平安
11	東深石坂南遺跡	散布地	古代	45	正福寺南瀬跡	散布地	平安
12	東深石坂北遺跡	散布地	直文・手字・古字	46	正福寺前山遺跡	散布地	中世?
13	鈴の土原跡	城壁	中世	47	金クソ山遺跡	製鉄	古代
14	東保高池遺跡	散布地	手字・直文	48	金クソ山西遺跡	製鉄	古代
15	東保般若堂遺跡	寺院?	中世?	49	増山琵子地窯跡	窯	奈良
16	高坪遺跡	散布地	手字・直文・古字	50	増山赤坂窯跡	窯	平安
17	東保高池南遺跡	散布地	古代?	51	正福寺後島窯跡	窯	平安
18	宮森新北島I遺跡	廻	鶴文	52	正福寺後島遺跡	遺跡・墓群	平安
19	光明真言寺	經塚?	中世?	53	増山十村山遺跡	遺跡・墓群	鶴文・直文
20	宮森遺跡	散布地	鶴文	54	小丸山演習跡群	廻	平安
21	大谷寺遺跡	散布地	直文・手字・古字	55	増山外貝塚山窯跡	製鉄	直文・手字
22	鷹鳥寺遺跡	集落	鶴文	56	増山焼山遺跡	製鉄	古代
23	宮森新經塚	經塚	中世?	57	増山外貝塚山遺跡	散布地	旧石器
24	鷹鳥寺境内内遺跡	廻?	難観	58	増山後山窯跡	病・製鉄	平安
25	宮森新跡	散布地	奈良	59	増山外法蓮山窯跡	窯	平安
26	宮森新天池遺跡	散布地	鶴文	60	増山御坂山遺跡	製鉄	古代?
27	上田遺跡	散布地	鶴文	61	西谷No.7遺跡	炭窯?	古代?
28	長尾城原尾跡	廻	中世?	62	西谷No.8遺跡	炭窯?	古代?
29	長尾能原尾跡	廻	中世?	63	西谷No.5遺跡	炭窯?	古代?
30	袖成新道跡	散布地	鶴文	64	西谷No.6遺跡	炭窯?	古代?
31	片谷下六門遺跡	散布地	手字・直文	65	西谷No.5遺跡	炭窯?	古代?
32	千光寺遺跡	寺院	中世	66	西谷No.4遺跡	炭窯?	古代?
33	片谷遺跡	散布地	手字・直文・古字	67	西谷演習跡	窯	平安
34	泡原遺跡	遺跡・墓群	手字・直文・古字	68	西谷No.10遺跡	炭窯?	古代?

第1表 周辺の遺跡一覧



第2図 平成10年度調査範囲
(増山城郭群遺構概念図
平成3年3月高岡徹作図に加筆)

100m 200m

* 棚台または橋台とみられる遺構

III 調査の経過と方法

1. 調査の経過

今年度調査地については、馬洗池は湿地であることから木製品などの遺物の検出、K郭は堀に挟まれた防禦の要地であること、「二の丸」南側空堀は主郭と考えられる郭の堀であることが選定の理由である。

発掘の事前に、発掘調査対象区およびその周辺の下草刈りを実施し、並行して堆積物の除去作業もを行い、地形の変化が分かり易いように努めた。その後、幅約1～2mでトレンチを設定し、最終的には計10ヶ所の掘削を行った。トレンチの設定については、平坦面や堀・格台に直交するとともに、断面図にて各所のエレベーションを確認できるように設定した。掘削は地山面までを基準としたが、層位関係で地山面まで到達していないトレンチも存在する。掘削は、機械の進入が困難であるため人力にて掘削を行った。また、立木の伐採は基本的に行わないこととし、トレンチ内においても立木を残している部分がある。

調査にあたり、平成9年度より増山城跡総合調査委員会を組織し、調査方法・調査地点などについて検討する機関としている。調査前には今年度の調査対象区の選定と具体的な調査方法を検討し、調査期間中には現地にて遺構・遺物の検出状況を確認しつつその時点での発掘の成果や今後の調査について検討を行った。調査後には、調査の結果報告および今後の調査について確認した。

調査終了の後、地元住民を対象として現地説明会を開催した。天候不順な中、約60名の見学者が訪れ盛況をみせた。埋め戻しは人力にて行った。斜面では崩落を防ぐため、土のう袋を積み上げることによって斜面を復元した。

2. 座標軸の設定(第3図)

座標軸は増山城跡から亀山城、孫次山砦などを視野に入れ、国土地理院設定第VII座標系のうち $X = 72.5\text{km}$ 、 $Y = -11.5\text{km}$ の点を原点として設定した。南北軸をX軸とし、 $X = 0$ から北方向へX座標の数値が増える。同様に東西軸はY軸とし、 $Y = 0$ から東方向へ進むにつれて、Y座標の数値が増える。1グリッドの区画は $10 \times 10\text{m}$ とし、今年度の調査区の範囲は $X = 380 \sim 640$ 、 $Y = 170 \sim 320$ である。また、今年度の測量調査対象面積は約 $65,000\text{m}^2$ で、発掘面積は約 130m^2 である。

IV 調査の概要

1. 概況

調査対象地区は増山城跡の南東側、標高約 100m ～約 113m の山地中に所在する。一帯の現況は、

杉や雑木などの森林となっており、杉は戦後の植林による。地元の方によれば、増山城跡における比較的高位の平坦面は、戦後までは畠として利用されていたそうである。

城域各地の名称は、増山城跡調査報告書〔砺波市教委ほか1991〕の高岡徹氏による各郭の仮称を参考とすることとした。このときB郭は俗称として「二の丸」と呼称されているが、主郭としての機能をもっていたとみなすものである。以上より、K郭、内堀、外堀、馬洗池、B郭南側空堀と呼称することとする(第4図)。

2.造構(第5～8図)

(1) K郭(T2-1・2・3・4)

最上部平坦面の面積は約700m²で、現地形観察では東南方向にさらに二段の平坦面がある。標高は109～113mを測る。この郭は空堀を埋めることによって造成されたことが確認された。空堀は地表面下約2m(標高110～111.8m)の底面があり、最大幅は約4.5mである。ほぼ南北に郭を縦断するが二段目の平坦面付近で西方へ屈曲し外堀に至る。北側は内堀壁面に空堀断面がみられる。

郭の南端では、高位段丘礫層を掘り込んで郭を造成している。郭は一部のみ確認され、全体の面積は不明であるが、幅約15cm、深さ約3cmの溝をもつ。

(2) 内堀(T3)

K郭下端で堀底を確認し、標高は約104.5mである。堆積土が厚く、湧水が著しいことから、B郭下端では堀底を確認していない。K郭斜面には、空堀の断面が見える。

(3) 外堀(T4-1・2)

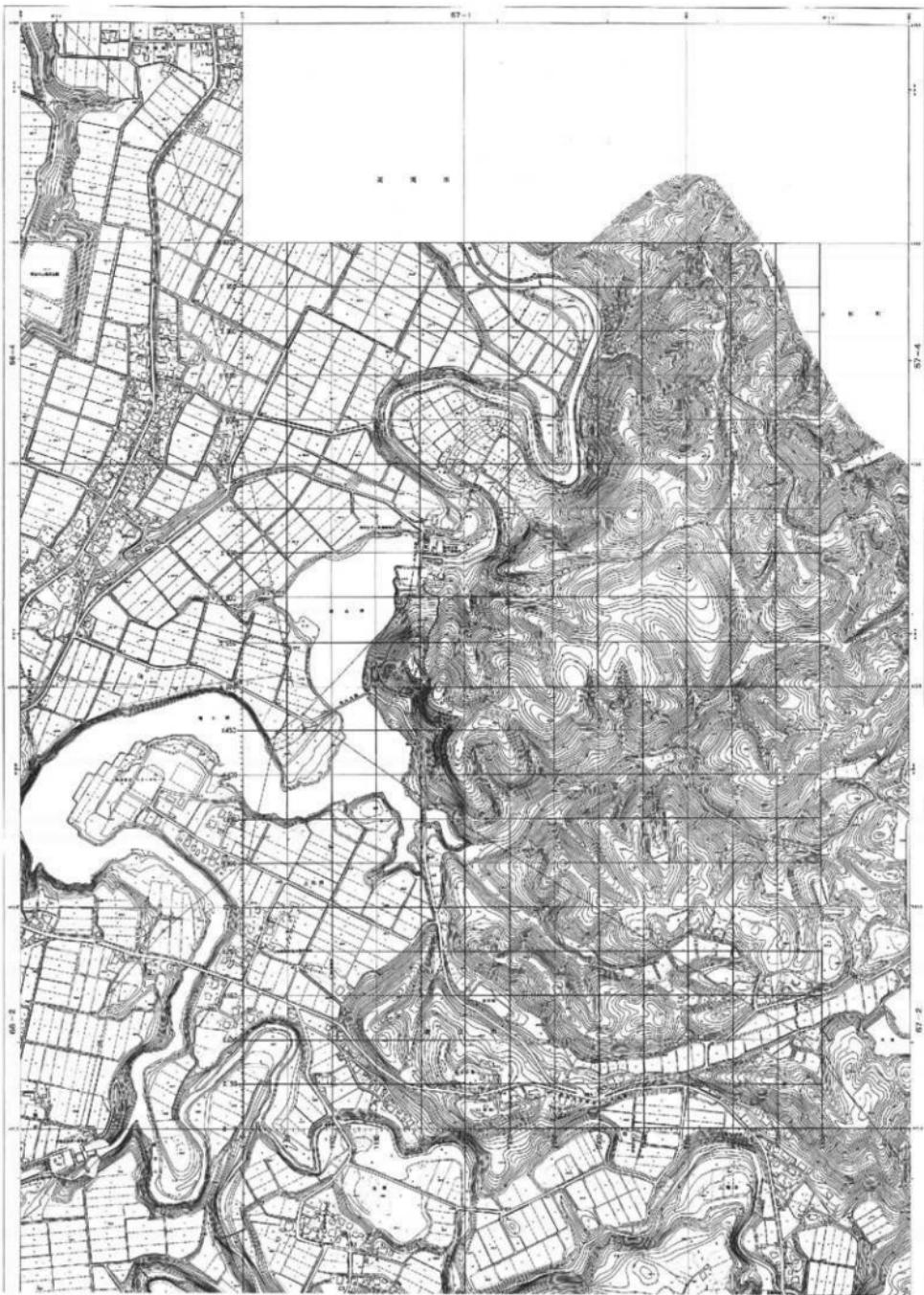
現地表面から約2.5m掘り下げたところに底面が検出され、底面は約1.2mの幅をもつ。高位段丘礫層・岩盤を掘り込んで空堀を造成しており、空堀の斜面角度は約50度、底部近くでは約70度の急角度となる。K郭とは比高差が約10mで、大規模な土木工事を推測させる。空堀の南部外側にあたる高まりは、空堀底部から約5mの比高差がある。空堀造成の際に防御施設として尾根部分を残していると考えられる。遺物はT4-1・2とともに確認されていない。

(4) 馬洗池(T1-1・2)

「馬洗池」という通称からわかるように、元米湿地であり、降水期にはある程度の水を湛える池である。調査では現地表面より約1.4m(標高約107m)において幅広い平らな底を確認した。底面は礫層で東西約12mの幅をもち、その形態から水の利用を目的として造成したと考えられる。B郭の据部では、上部から崩落した焦土が厚く堆積している。

T1-2では暗渠跡を確認した。馬洗池は少なくとも戦前から水田として利用されており、その当時のものと思われる。

T1-1より検出されている遺物は多く、土師器(第11図1・3～5・6・8)や珠洲焼(第11図13)、桶の取っ手(第11図15)や底板(第11図16)、漆塗の椀(第11図17)などの木製品がある。

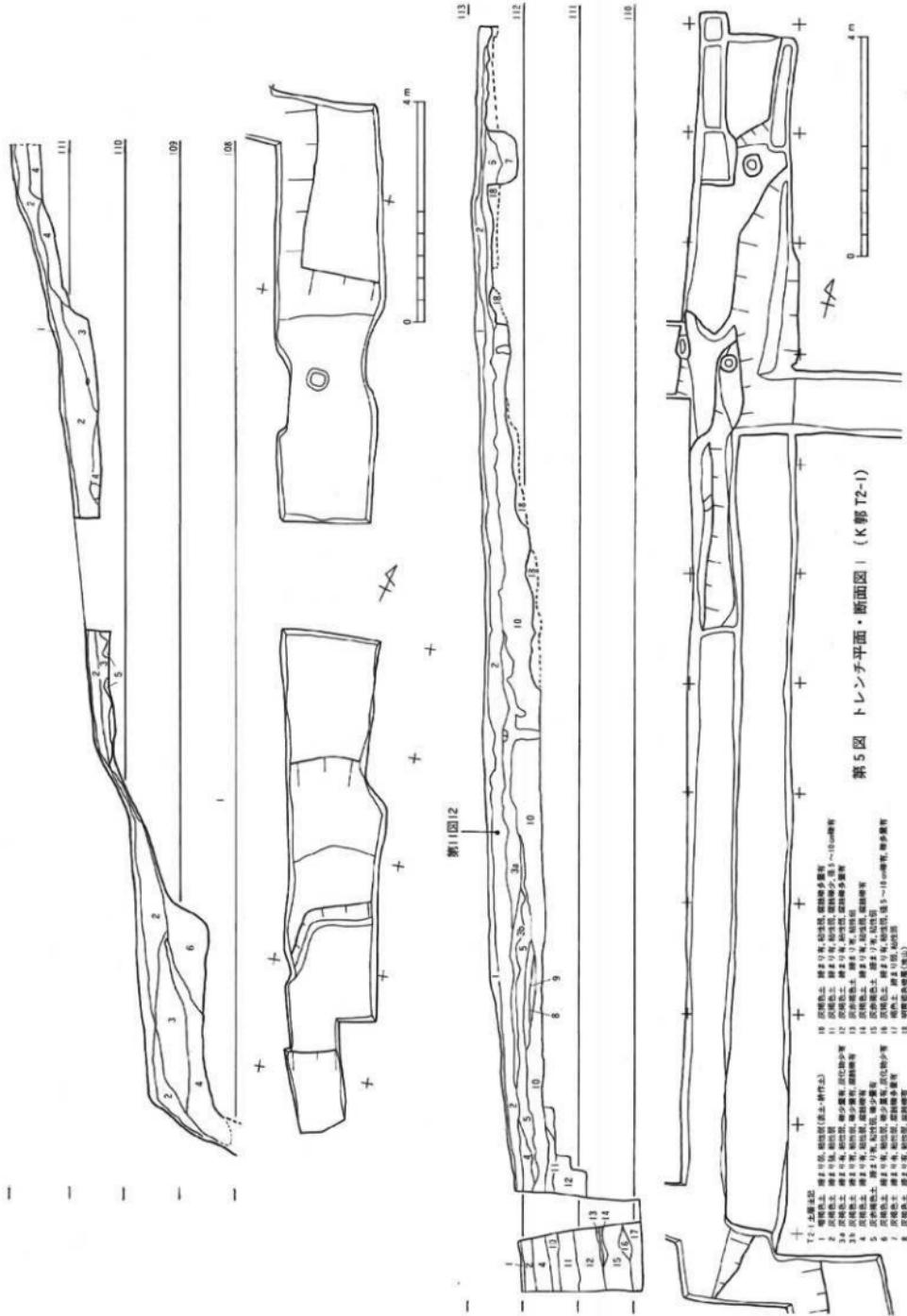


第3図 グリッド配置図 ($S = 1/2500$)



第4図 トレンチ・断面位置図

0 50m



第5図 ドレンチ平面・断面図 (K部 T2-1)

1. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。灌水頻度多く。

2. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

3. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

4. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

5. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

6. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

7. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

8. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

9. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

10. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

11. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

12. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

13. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

14. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

15. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

16. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

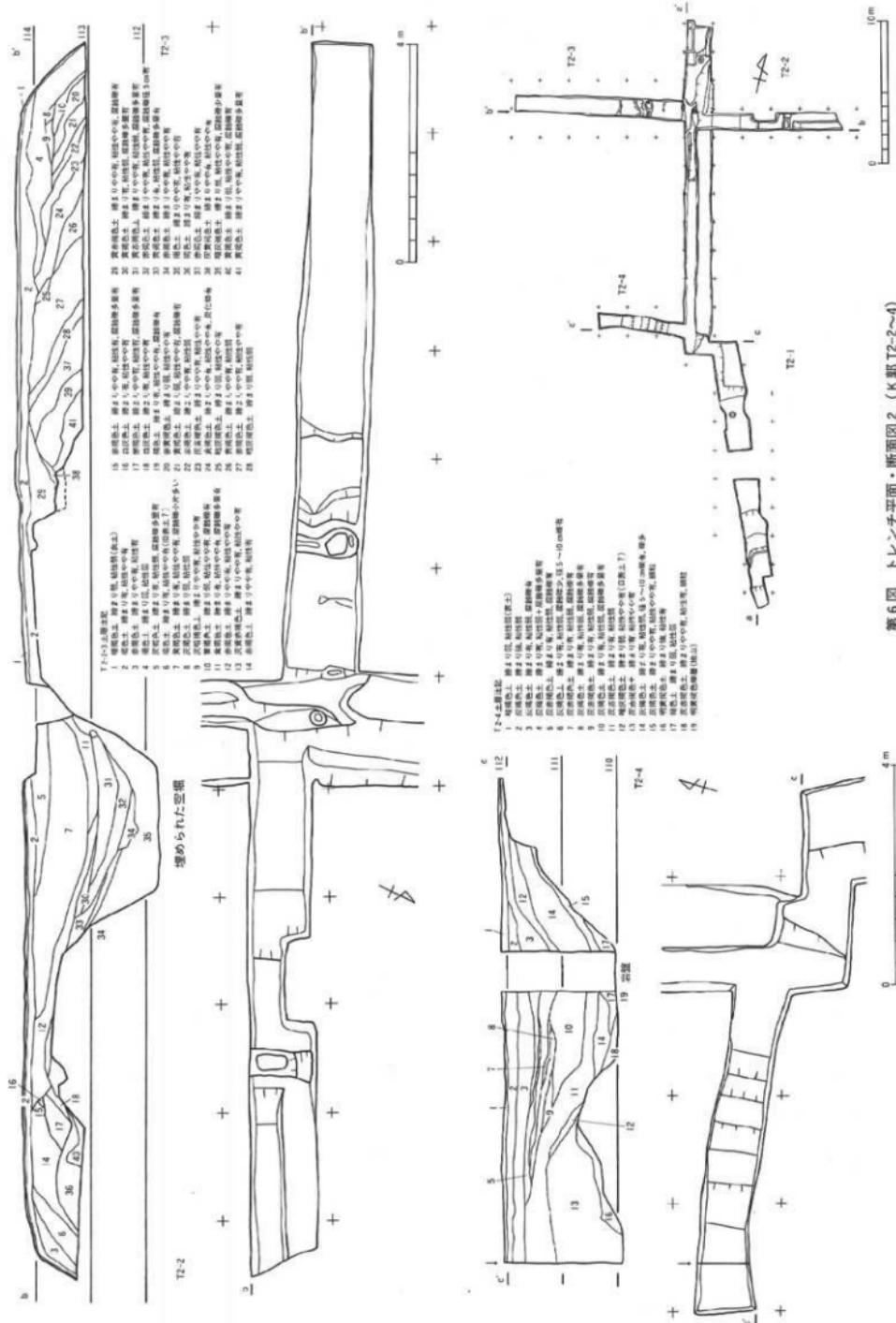
17. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

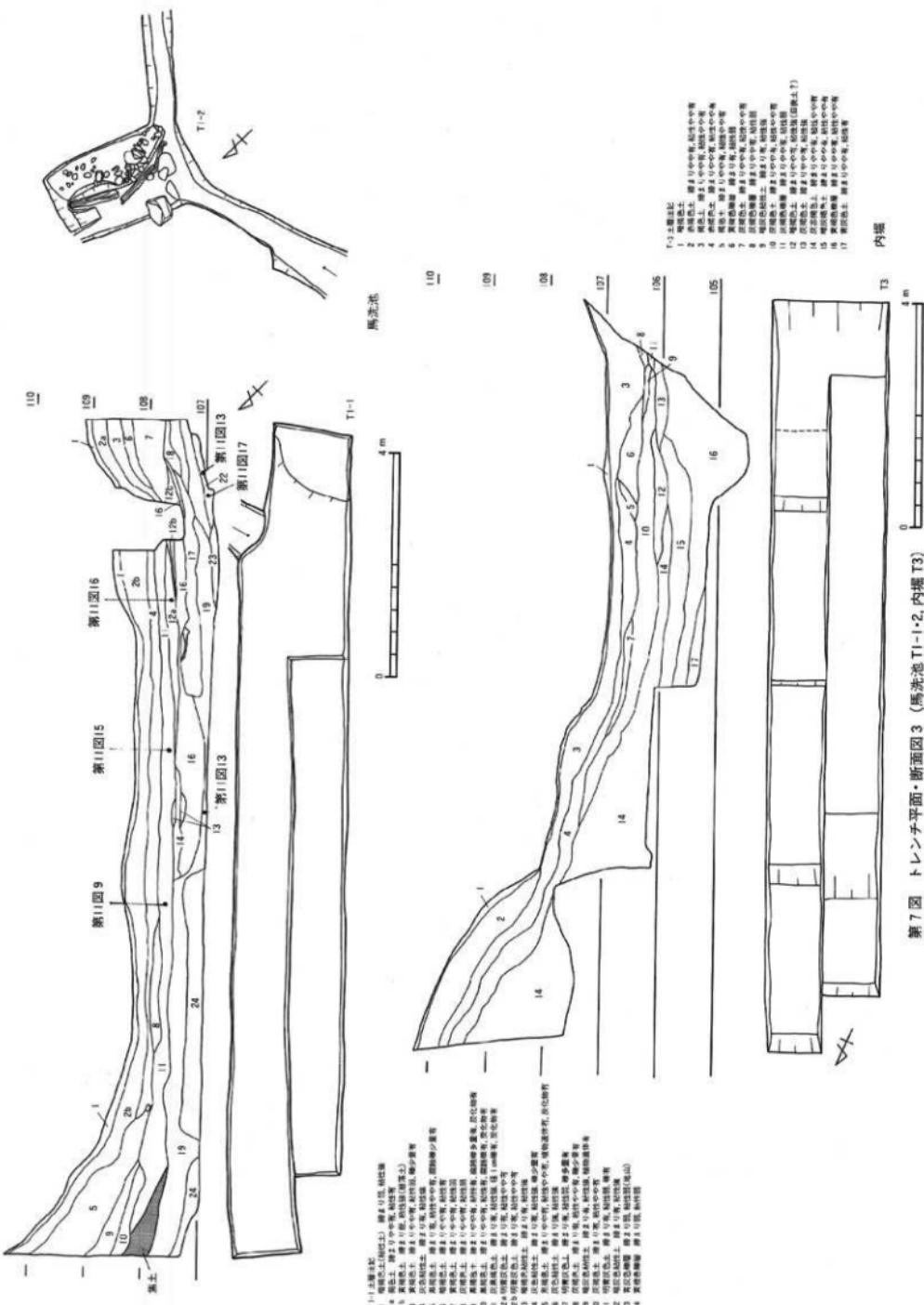
18. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

19. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

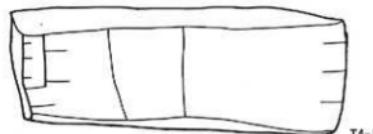
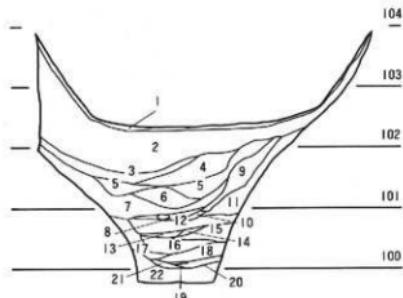
20. 深褐色。土壌は砂質で、排水性良好。灌水頻度多く。

第6図 トレーンチ平面・断面図2 (K郭 T2-2~4)

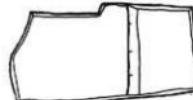




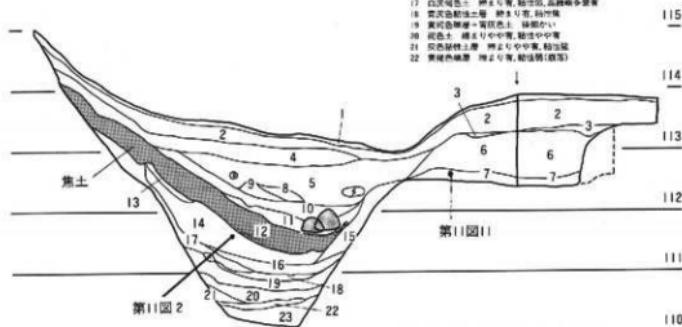
第7図 ドレンチ平面・断面図3(馬洗池T1-1-2, 内堀 T3)



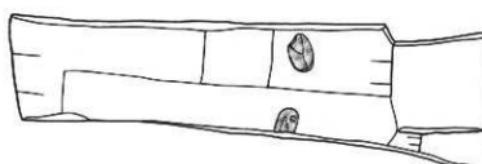
外語



J4-2



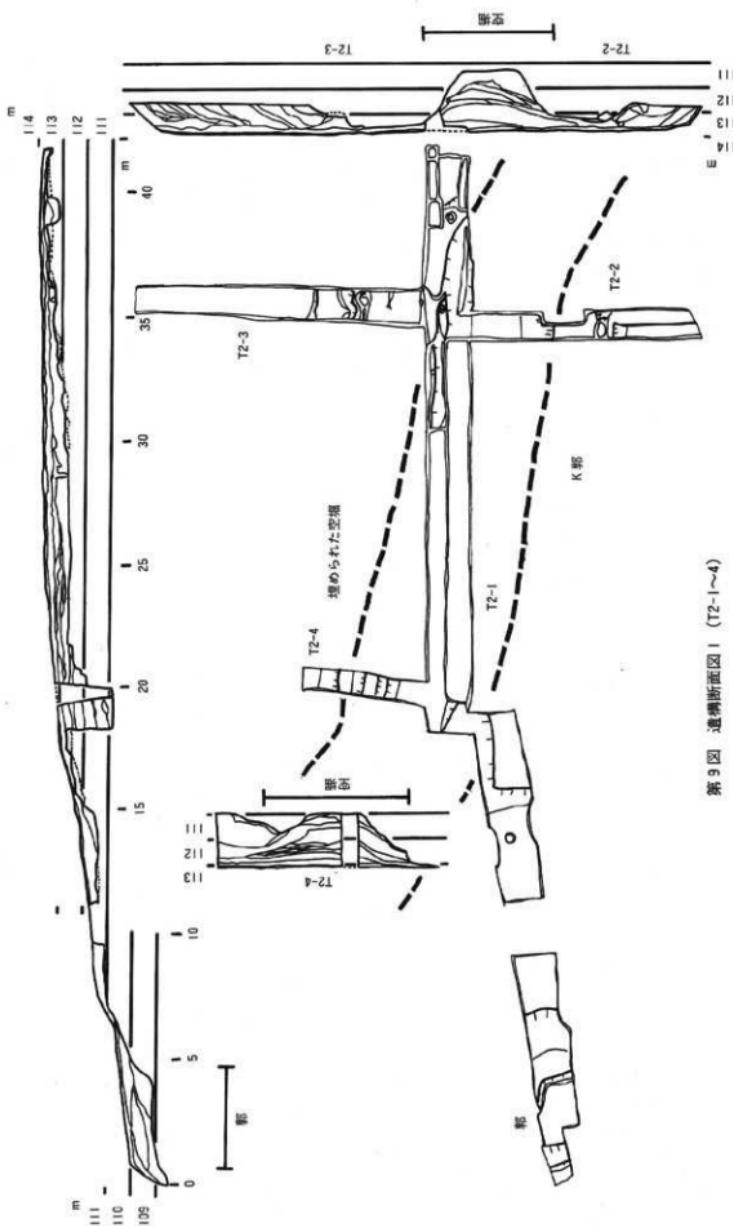
見解與研究

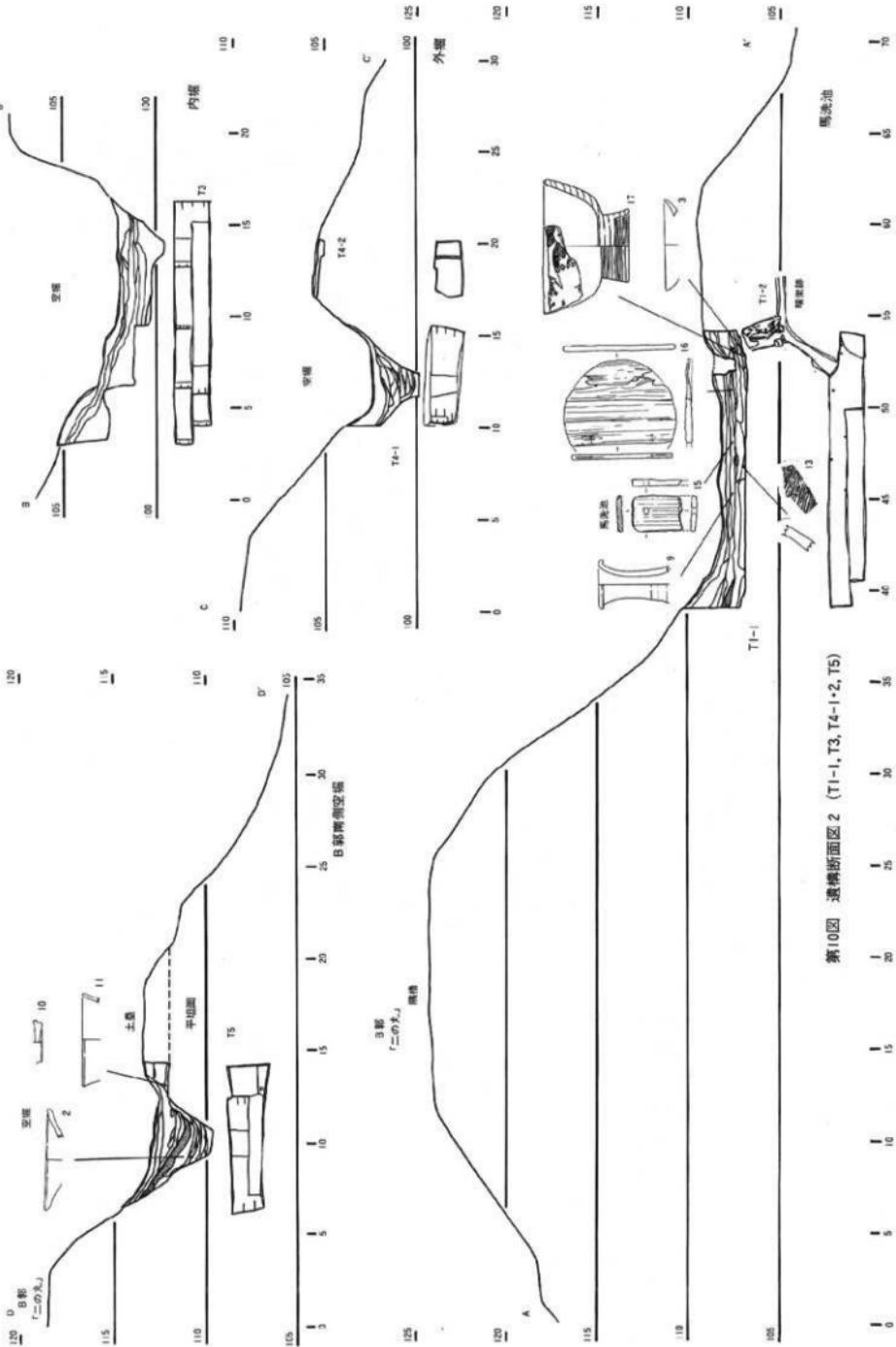


脚本五

第8図 トレンチ平面・断面図A (外堀T4-1・2 B郭南側空堀 T5)

第9図 連繩断面図 (T2-1~4)





第10図 遺構断面図2 (T1-1, T3, T4-1・2, T5)

(5) B郭南側空堀

現地表面より約3m(標高約110m)において、約1.2m幅の底面を確認した。底面標高がK郭で確認された空堀の底面標高とほぼ同じであることから、同時期に造られ、連続する空堀であった可能性が高い。空堀は高位段丘疊層を削ることによって造り出している。地層断面の観察から、馬洗池と同様に焦土の厚い堆積が認められる。また空堀南壁の傍で標高約112mにおいては、最大長約60cmおよび45cmの大きな石が2個体確認されており、B郭からの崩落石と考えられる。空堀に沿って東西に伸びる高まりは、疊層上に盛土をして土塁を造っている。疊層上面は検出状況から、-時期平坦面を呈していたようである。遺物は土師器(第11図2)、唐津(第11図11)、瀬戸美濃天日茶碗(第11図10)が確認されている。

3. 遺物

今回の調査区からは土師器、越中瀬戸、瀬戸美濃、唐津、珠洲、越前、近世陶磁器、木製品の遺物が確認された(第11図)。

土師器(1~6・8)

1~5は中世土師器。口径10~12cmを測る。2には口縁部付近に煤が付着していることから、灯明皿としての利用が考えられる。15世紀末~16世紀初頭。3は14~15世紀頃か。6・8は黒色を呈する土師器皿。1・3~5・6・8はT1-1より、2はT5より出土。

瀬戸美濃(7・10)

7・10いずれも天日茶碗。10は底部で、底面中央部は凹みがある。16世紀初頭か。7はT2-1、10はT5より出土。

唐津(11)

11は唐津碗。口径は約10.5cmである。16世紀末か。T5より出土。

珠洲(13)

13は珠洲焼甕で、14~15世紀頃と思われる。T1-1から出土。

越前(14)

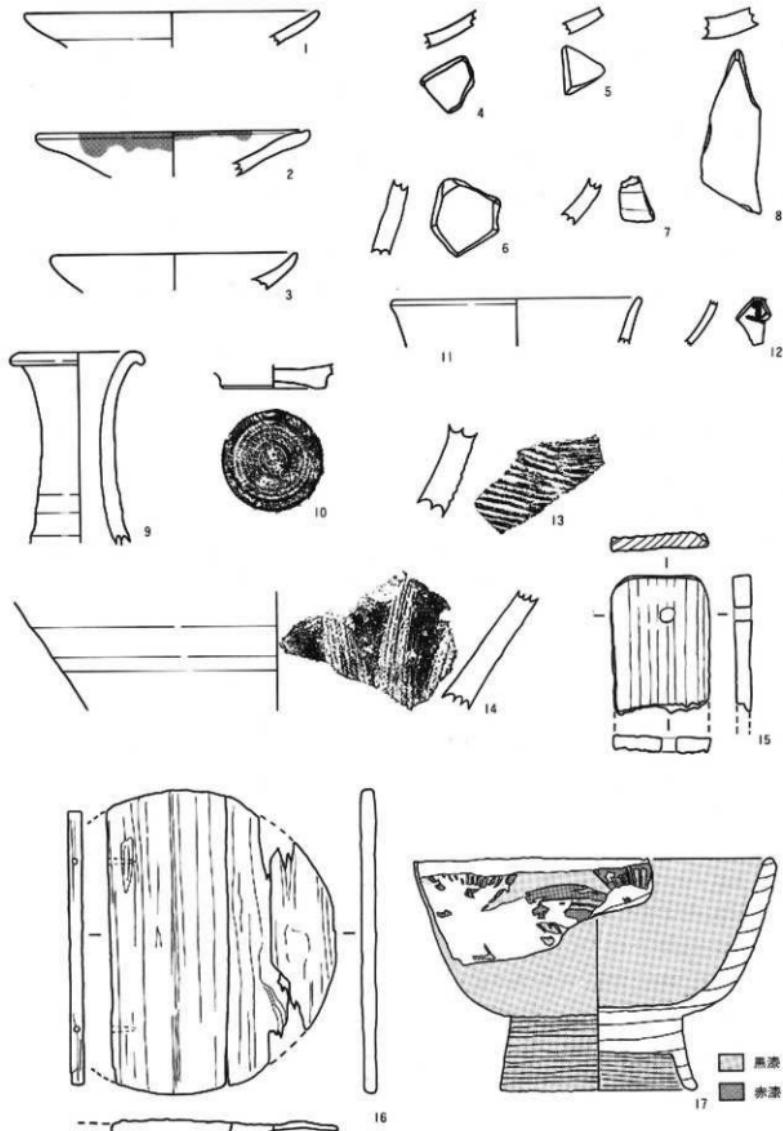
14は越前の擂鉢。内外面に鉄軸が施され、8条の施文具による条痕がある。表採。

近世陶磁器(9・12)

9は壺口縁部。鉄軸のち灰軸を施す。口縁端部は丸く外反し、頸部では数状のヨコナデによる施文がある。口径は約4cm。12は椀の一部で、模様がみられる。いずれもT1-1より出土。

木製品(15~17)

15・16は桶の一部と考えられる。15は取っ手で、角は丸められ、板の厚さは約1.5cmである。上部から約2.5cmの部分には約1cm大の穿孔が施され、板自体はやや内反する。16は底板。径約25cm、厚さは約1.2cmを測る。断面には径約5mm深さ約2cmの穴があり、これは何らかの理由により板をつな



1~6, 8. 土器
7, 10. 湘戸美濃天目茶碗

9, 12. 近世陶磁器
11. 唐津

13. 珠洲

14. 越前

15. 桶取手

16. 桶底

17. 桶

第11図 出土遺物

15, 16. 0

1~14, 17. 0

20cm

10cm

ぐ必要が生じ、補強具として心棒をえたものと考える。17は漆塗りの椀で、内外面共に黒漆が塗られている。外面には剥離が進んで鮮明ではないが、赤漆による扇状の模様が確認される。器高は9.5cm(椀部6cm、脚部3.5cm)、口径は15cmを測る。16世紀後半か。いずれもT1-1からの出土。

V まとめ

平成10年度は平成9年度に引き続き、増山城跡南部を対象域として発掘調査を実施してきた。平成10年度は特にB郭東南部域を中心として、K郭や空堀、通称「馬洗池」などの調査を行った。

K郭では、平坦面が空堀を埋めることによって造成されたという大規模な土木工事の痕跡を明らかにすることことができた。この空堀はほぼ南北に郭を縦断するが南側二段目の平垣面付近で西方へ屈曲し外堀に至り、また北側内堀壁面に空堀断面がみられることから、当初は外堀付近からB郭南側空堀まで連続して形成された可能性が高いことを示している。空堀が埋められた理由については、より堅固な城の守りとするために空堀の位置・方向を変え、合わせて郭を造成したのではないだろうか。K郭南側三段目の平垣面では、高位段丘疊層を掘り込んで郭を造成している。この郭の全体像は不明だが、外堀に向かっての防御施設と考えられる。

K郭は北側・南側に存在する2本の空堀(内堀・外堀)に挟まれている。この二重に配置された空堀は、切り合い関係からK郭において確認された空堀よりも後に造成が行われている。当初の空堀配置を変更し新たに二重の空堀を造成するというプランの変更は、空堀の埋め立て状況からみて短期間で実行されている。

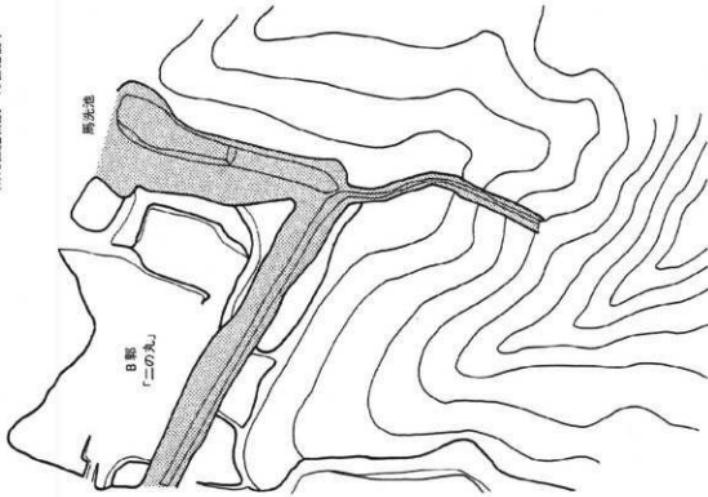
外堀南側にある高まりは、南側からの外敵を防護するための見張り台として利用されたと考えられる。B郭からの防御ラインは、B郭一空堀(内堀)→K郭一空堀(外堀)→外堀南側高まりとなり、平成9年度発掘調査区の無常から南柵台の状況と類似した造りとなっている。

馬洗池は通称「三の丸」「安室屋敷」からつながる空堀の一部であるのか、通称のとおり池としての機能をもって造られているのか、その実態は不明瞭であった。今回の調査結果から、ある程度の深さがあり幅広い平らな底面を確認したことから、元来、水の利用を目的として造成されたと考えられる。調査中には湧水が豊富だったことからも、常備水として充分な量の水を得ることができたであろう。

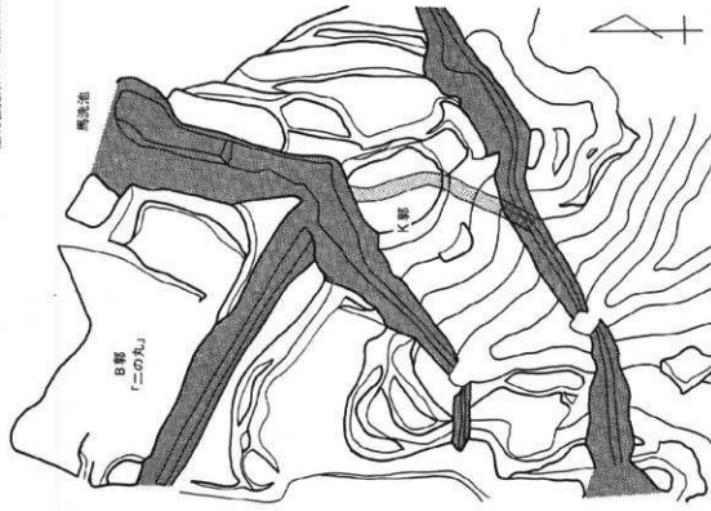
B郭南側空堀は、出土遺物から16世紀初頭までは造られていたようだ、底面標高がK郭で確認された空堀の底面標高とほぼ同じであることから、連続する空堀であったと推測される。また空堀の南側に沿って土塁が築かれており、盛土中には16世紀末頃の唐津碗が確認されていることから、土塁は16世紀末の造成と判断できる。盛土はやや平坦な疊層上に実施されており、ある程度の広さをもった平坦面が存在していたようである。

馬洗池およびB郭南側空堀のB郭斜面下端には、焦土の堆積が確認されている。これはB郭から

(1)16世紀初頭～16世紀後半



(2)16世紀末～17世紀初頭



第12図 K 郡周辺部における空堀・郭の変遷

の崩落によるもので、何らかの理由により建築物が焼失していることが推測される。古文書では、「歴代古案(別本12)」中の天正9年(1581)5月13日黒金景信書状には「増山なとも焼払」とあり、織田方によって増山城が焼き払われたという記述がみられる。空堀および土塁の出土遺物から、焼き払い時の痕跡である可能性も考えられる。

出土遺物は馬洗池・二の丸南側空堀にてそのほとんどが出土している。15世紀末～16世紀末までの遺物年代で、希に珠洲焼など14～15世紀の遺物が存在する。馬洗池出土の漆塗り碗については、底厚で高台が高く碗部の立ちあがりが強いことから、四柳編年(四柳1997)よりIX-3期(16世紀後半)としたい。

さて、増山城跡については平成9年度調査においても大規模な土木工事が実施されていることが認識されたが、今回の調査で大胆な構造プランの変更を行って、当初のものから大幅に姿を変えていることが明らかになった。特に顕著なのは、空堀の方向を縦から横へ変更しさらにその本数を増やしていることがあげられる。同時に、先に存在した空堀を大量の土によって埋めることにより、広大な郭を造成していることも良い事例であろう。空堀の2度にわたる造成時期は、1度目は少なくとも16世紀初め頃には実施されていたと考えられる(第12図(1))。B郭南側から尾根筋に沿って南部斜面へ弧状の曲線を描きながら存在し、南からの外敵を阻んでいる。2度目は土塁盛土中の唐津碗から16世紀末頃と推測される(第12図(2))。二重の空堀と郭の造成は、当時の戦時下における戦況の壮絶さと砺波地方における拠点として増山城の重要性を示している。また、過去2年間の調査結果から、城造りの当初より城の中心域だけではなくその周辺域においても、城全体の構造を念頭においていた土木工事が行われていたことが確認された。15世紀末～16世紀初めの遺物が出土しているので、このころから当地周辺で造成が始まられたのだろうか。いずれにせよ、少しづつではあるが増山城跡の様相が明らかになってきた。と同時に、多くの疑問点が浮かび上がってきていている。次年度以降もこの成果および疑問点をふまえ、増山城跡のその本来の姿を明らかにしていきたい。

＜引用・参考文献＞

砺波市1990「砺波市史資料編1考古・古代・中世」

砺波市教育委員会1978「富山県砺波市梅檜野遺跡群予備調査概要」

砺波市教育委員会1998「増山城跡！」

砺波市教育委員会・砺波郷土資料館1991「増山城跡調査報告書」

北陸中世土器研究会編1997「中・近世の北陸－考古学が語る社会史－」

四柳嘉章1997「概説 北陸の漆器考古学－中世とその前後－」「北陸の漆器考古学－中世とその前後－」北陸中世土器研究会編



写真図版 I

1. 増山城跡南西より
2. TI-1 発掘状況南より
3. TI-1 二の丸下端南より
4. TI-1 地層断面南より
5. TI-2 暗渠東より



2



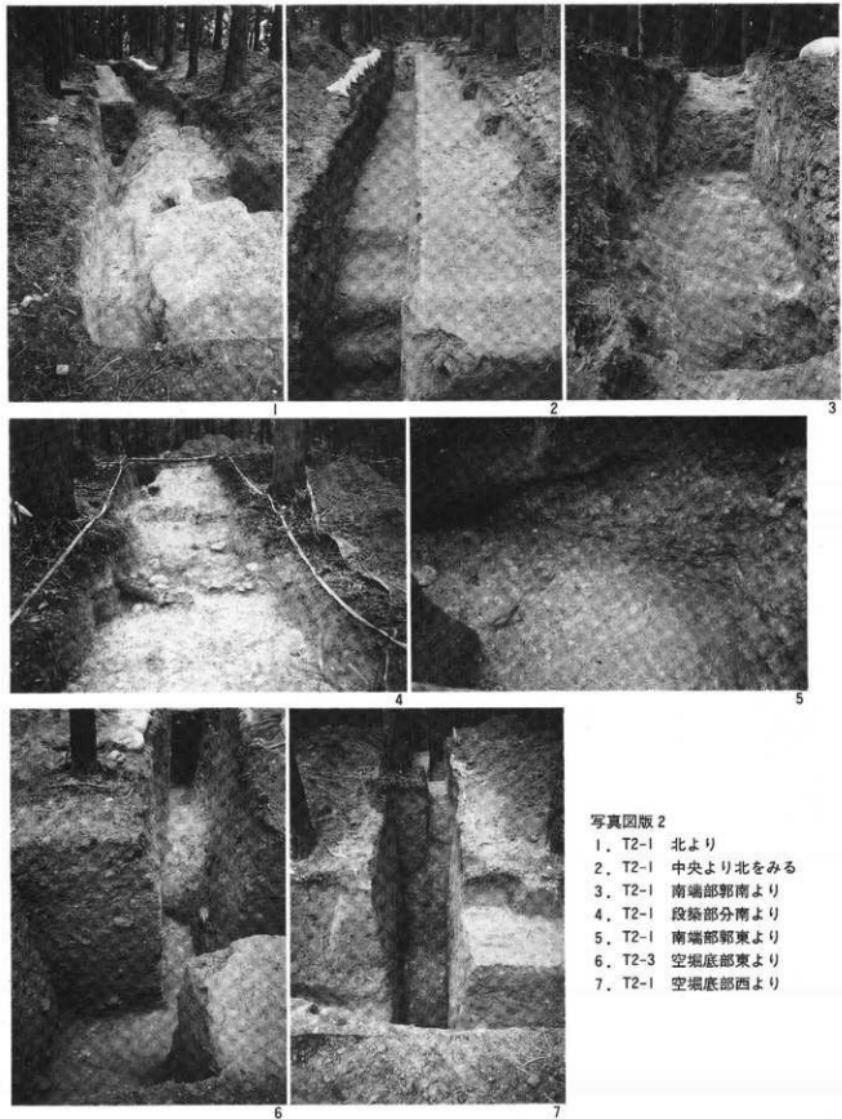
3



4

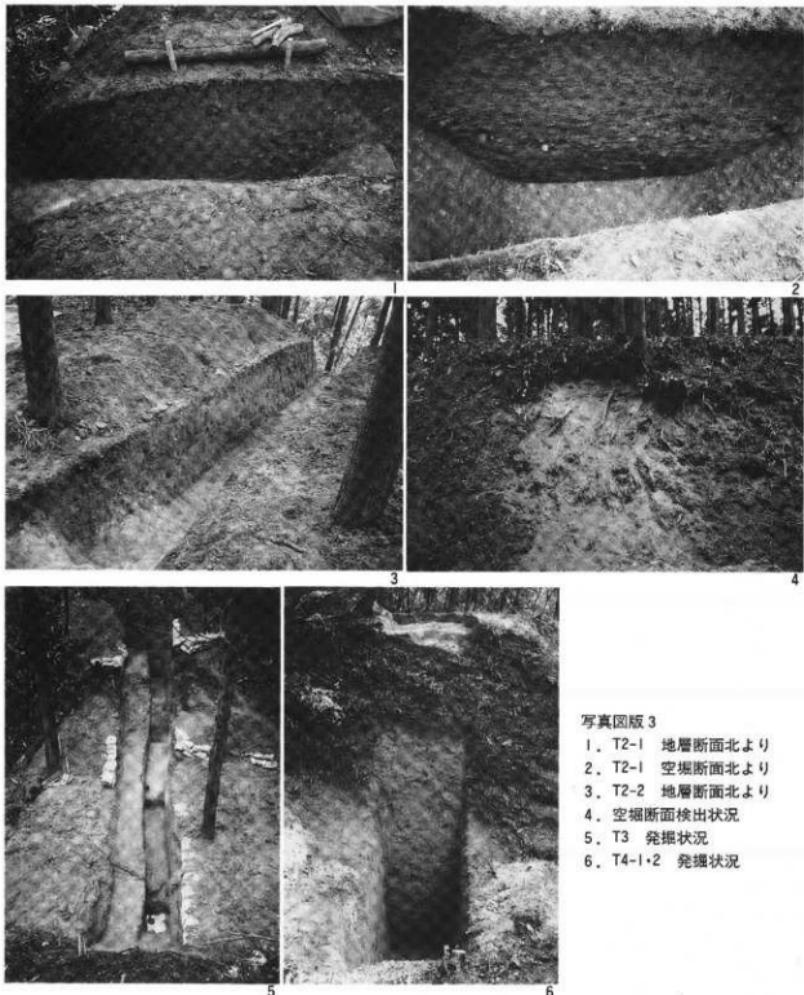


5



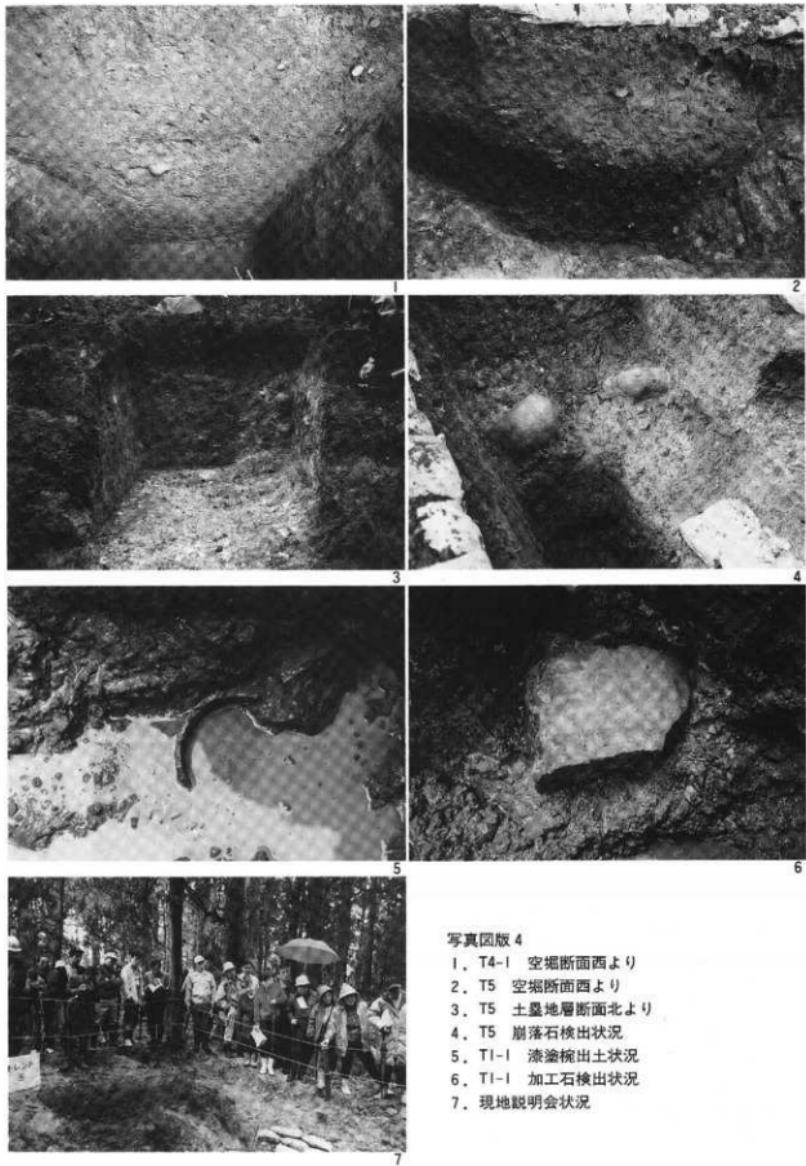
写真図版 2

1. T2-1 北より
2. T2-1 中央より北を見る
3. T2-1 南端部郭南より
4. T2-1 段築部分南より
5. T2-1 南端部郭東より
6. T2-3 空堀底部東より
7. T2-1 空堀底部西より



写真図版 3

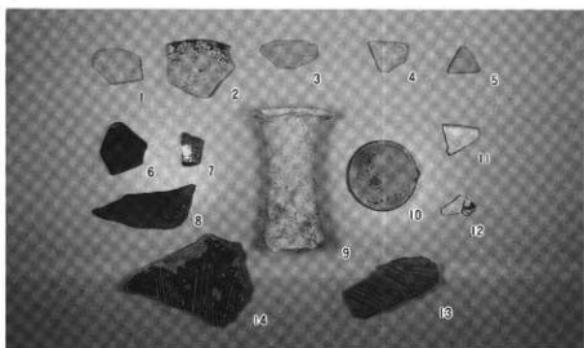
1. T2-1 地層断面北より
2. T2-1 空堀断面北より
3. T2-2 地層断面北より
4. 空堀断面検出状況
5. T3 発掘状況
6. T4-I・2 発掘状況



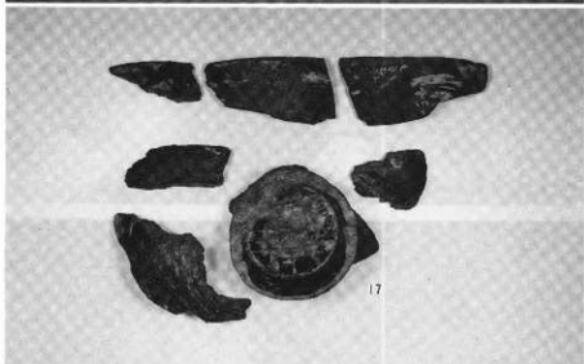
写真図版 4

1. T4-I 空堀断面西より
2. T5 空堀断面西より
3. T5 土壘地層断面北より
4. T5 崩落石検出状況
5. TI-I 漆塗椀出土状況
6. TI-I 加工石検出状況
7. 現地説明会状況

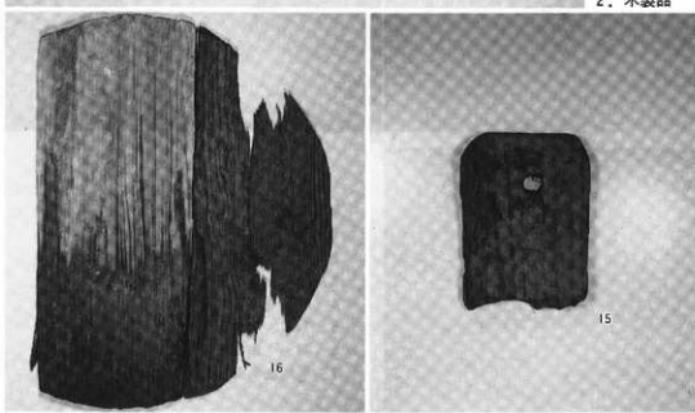
写真図版 5



1. 土器類



2. 木製品



報告書抄録

ふりがな	ますやまじょうせき								
書名	増山城跡								
シリーズ名	(2)								
編集者名	利波民裕								
編集機関	砺波市教育委員会								
所在地	〒939-1398 富山県砺波市栄町7-3 TEL(0763)33-1111								
発行機関	砺波市教育委員会								
所在地	〒939-1398 富山県砺波市栄町7-3 TEL(0763)33-1111								
発行年月日	西暦1999年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (対象) m ²	調査原因		
増山城跡	富山県砺波市 増山字一の丸 3324 外	208	001	36° 39° 55"	137° 2° 41"	981016～ 981209	対象面積 1,600 発掘面積 160	埋藏文化財 緊急調査事業	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項				
増山城跡	山城	中世	空堀 郭 馬洗池	中世土器、 中世陶磁器、 木製品					

平成11年3月

増山城跡 II

編集 砺波市教育委員会
発行 砺波市教育委員会
富山県砺波市栄町7-3
印刷 リチューエツ

